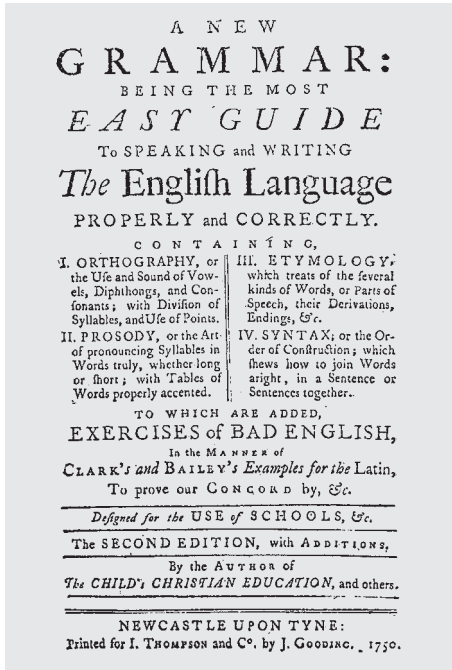


誤文訂正練習法について  
——アン・フィシャー『新英文法』と18世紀イギリス  
の初等英文法教育

鶴見良次

18世紀半ばには、貧しい子供のための入門的な文法の教科書として成功をおさめたものがいくつかあった。たとえばウィリアム・ラウトンの『実践英文法』(1734)やジョン・コリヤの『一般基本文法』(1735)<sup>1</sup>などを挙げることができる。多くは、実際にチャリティ・スクールなどの学校で用いられることを念頭に、教師によって著されたものであった。ようやく読み書きに接するようになった生徒に実際に教室で文法を教えることを意識して書かれたそれらの教科書は、17世紀までの、英文法そのものの確立を目指して書かれたいわゆる文法書とは異なり、生徒の理解力に合わせた指導上の工夫を含んでいることが多い。ニューカースルの勤労女子のための学校教師アン・フィシャーが著わし、チャリティ・スクールなど多くの学校でも用いられたと考えられる『新英文法』([1745])<sup>2</sup>もそのような教科書の一冊である。特に、同書で提唱された、統語上の誤りを含んだ文の訂正を行う「誤文訂正練習法」(Exercises from false concord)は、具体的に効果的な指導法の一つとして、世紀後半に多くの文法教科書で推奨された。本稿ではこの練習法に注目し、この時期の代表的な初等文法教科書の一つである同書の内容とその指導法について考察する。

『新英文法』は1745年6月29日付けの『ニューカースル・ジャーナル』紙に宣伝があることから、同年の刊行であると考えられている。<sup>3</sup> 現存する最も古いものは50年刊の第2版である。(図1) R・C・オールストンの書誌によれば、51年(あるいは53年)、54年、57年にそれぞれ3、4、5版が出たあと、1800年までの間に、何版であるかが明らかなものが31、および明らかでないものが多数出されている。人気の絶頂期は75年から94年までの20年間で、20の版が見られる。18世紀の英文法書としては、



リンドリー・マリー、ロバート・ラウス、ジョン・アッシュのものに次いで多くの読者を得たものである。<sup>4</sup>

フィシャーはニューカースル・アポン・タインに生まれ育ち、同地の印刷業者トマス・スラックの妻となる。『新英文法』をはじめ、別稿<sup>5</sup>で紹介した学校用文芸アンソロジー『楽しい先生』(1756)のほか、『新英語教師』([63?])、『新英語練習帳』(70)<sup>6</sup>などの多くの初等英語教科書を著わした。それとともに、結婚前に勤労女子に読み書きや裁縫を教える夜学を運営していたことも知られている。「最初

図1 アン・フィシャー『新英文法』(第2版、1750)扉

の女性文法学者」とも呼ばれる彼女の民衆女子教育への貢献についてもすでに指摘されている。<sup>7</sup>

18世紀初頭から、ニューカースルでは貧しい子供や勤労少年のためのチャリティによる教育が盛んであった。1724年のキリスト教知識普及協会『チャリティ・スクール報告書』によれば、ニューカースルには6つの学校があり、生徒総数は220名であった。また、1842年の公文書『学校および慈善教育報告抜粋』には、18世紀中に、古典語ではなく英語を教える同地の5つのチャリティ・スクールに基金が提供されたことが記録されている。<sup>8</sup> ヴィクター・ニューバーグも指摘するように、著者が自らの学校だけではなく、地元や他の各地に隆盛するチャリティ・スクールをも意識して初等教科書の執筆にいそしんだと考えることもできる。<sup>9</sup> 上で触れた新聞広告では、著書とともに学校の宣伝もなされている。「最も優れた綴字教科書と文法書による読み方、および書き方、美しく易しい裁縫の教授を行う」とある。またその5年後に同紙（4月28日付け）に再び出した宣伝には、よりくわしく、発音、綴字、分節、句読法、抑揚、強勢、品詞などが学ばれることが明示されるとともに、正しい読み書きにいかに関法の学習が重要であることを強調する次のような文が見られた。

Whatever may be pretended, or whatever Pains taken by rote, it is presumed that no continuing Certainty, or perfect Correctness in Spelling, no regular or just Manner of Accenting, no pathetic or strictly intelligible Method of Reading or Speaking, or even a tolerable Judgement in any kind of Writing, can be acquired by an English Scholar, without a thorough Knowledge of Grammar in all its Parts.<sup>10</sup>

この長い強調構文には、文法教育の必要を訴える著者の主張が強く込めこ

められている。それとともに、すでに『新英文法』を刊行し、その教授法を実践しようとする著者であり教師であるフィシャーの意気込みを窺うこともできる。

同書の第2版に付された「著者への書簡」(以下「書簡」と略記)には、カーライルの‘A. B.’との署名があり、推薦文とともに「指導法について」(以下「指導法」と略記)と題された小論が含まれている。その冒頭でその筆者は「生徒は、粗雑な読み方であれ、ある程度読めるようになったあとで「文法」を学び始めるものだが、ABCの第一歩から指導してやる方がよいという考えもある。そこで私はまず「正音学」(Orthoepy)、すなわち文字の正しい発音から始めようと思う」と述べている。たしかに、この頃までの初等英語教則本は、綴字に限定した内容のものが多く、一部に文法に関する内容が含まれていても、表題に「文法」という言葉は使われない。フィシャーの『新英文法』は綴字の解説を含んでいるが、幼い者やまったくの初学者向けのいわゆる綴字教則本ではない。綴字をある程度身に付けた生徒がよりくわしく学ぶもの、あるいは教師が指導のためにわかりやすく整理された知識を得るためのものと言える。

## II

同書を実際にひもといてみよう。序言、推薦文に続き、すでに触れた「指導法」がある。教師に対して、同書の内容を実際にどのように指導するかについての具体的な指示がなされている。その指導法については、のちにそれぞれの単元の内容を紹介する際にしばしば言及し、検討する。そのあとからが問答形式による英文法本体である。「文法一般について」と題された「序」が付されている。その冒頭が以下である。

Q. *WHAT is Grammar?*

A. *Grammar is the Art of expressing the Relation of Things in Construction, with due Accent in Speaking, and Orthography in Writing, according to the Custom of those whose Language we learn.*

Q. *What do you learn Grammar for?*

A. To learn to speak and write properly and correctly.

Q. *What does Grammar treat of?*

A. Letters, Syllables, Words, and Sentences. (p. 1)

第1問目の答えとなる文法の「定義」は17、18世紀転換期に活躍したラテン語学者リチャード・ジョンソンの『文法注解』（1706）の一節<sup>11</sup>をそのまま用いている。「構造をなす事物の関係」として文法を捉え、その規則を重んじるジョンソンは、「英文法の規範的傾向の重要なさきがけ」<sup>12</sup>となる文法学者であった。フィシャーの『新英文法』はラテン語文法の構造（正しい構文）という考え方を英語に適用し、文法規則をわかりやすく解説することを目指したものであると言える。基本的な教授法は、規範を示したうえで、誤用を禁じるというものである。その意味で、フィシャーの文法書は規範的分析と記述的分析の折衷的な性格を持つ。<sup>13</sup>

全体はラテン語文法由来の伝統的な4分法に基づく4部構成である。すなわち、1. 正書法(Orthography)、2. 韻律論(Prosody)、3. 語源学(Etymology)、4. 統語論(Syntax)である。

第1部の「正書法」は6章に分かれている。「文字とはなにか？」の問いに始まる第1章で、文字とアルファベットを学んだ後、第2章では母音の発音が学ばれる。第3章では二重母音、第4章では子音が扱われる。第5章の「綴りと分節」では、スペリングや音節の定義と分節の規則が、第6章では句読法が学ばれる。

「指導法」の筆者は、「正書法」は文法を学ぶ上では必須のものである。しかしその規則があまりにも多様なため、年少の生徒にとっては学んで覚えるどころか、理解できずに混乱しかねない。よって、できるだけ簡単に扱うことをお勧めする」と述べている。（「書簡」、7頁）たしかに子供にはわかりにくい細かい解説の例として、同書の‘i’の長音についての問答を挙げてみる。

Q. *Where is i pronounced long?*

A. 1. In all Monosyllables ending with silent *e*; as, *pine, wine, &c.*

2. Before  $\left. \begin{array}{l} gh \\ ght \\ gn \end{array} \right\}$  as  $\left\{ \begin{array}{l} high, \\ fight, \\ sign, \end{array} \right| \left\{ \begin{array}{l} ld^* \\ mb \\ nd \end{array} \right\}$  as  $\left\{ \begin{array}{l} child, \\ climb, \\ kind, \end{array} \right.$

\* Except *build, guild*, and in Words derived, from any of these. (p. 9)

本文ではこのように事例を挙げて分析的に規則や例外を説いており、煩瑣な印象を与えるが、「指導法」が勧めるのは、生徒の能動的な作業を含んだ具体的な練習方法である。（「書簡」、7-8頁）1. 表にした単語を暗記して綴る、2. 本を写す、3. 教師あるいは級友の読み上げる『スペクテーター』誌や新聞の記事の書き取りをし、そのできを比べて競争することなどである。『英語教育』の著者イアン・マイケルは、18世紀の綴字教科書でこのような書き取りの練習への言及のあるものはごくまれであると指摘している。書き取りが盛んに推奨されるようになるのは19世紀の、特に20年代以降であると言う。<sup>14</sup> さらに、教師は生徒の筆記帳の誤った綴りを正し、生徒は手帳にそれらの語のリストをアルファベットごとに作り、再度誤らないよう覚えることなどが指示されている。生徒、教師、級友の3者が共に行う多様な作業は、単調になりがちな正書法の学習に、ある種

の有機性を与えていると考えられる。英語学習のために筆記帳と手帳を各自に持たせるという点も興味深い。効率的な学習のテクノロジーへの意識とも言うべきものを認めることができるからである。

第2部の「韻律論」では、まず第1章で、アクセント、音の長さ (quantity) などの定義のあと、おもに複音節語のアクセントの位置についての規則がくわしく説明されている。

*Q. How are Polysyllables, that is, all Words of three or more Syllables, to be accented?*

*A. They are commonly accented either on the last Syllable but two; as, con-vé-ni-ence, op-por-tú-ni-ty; or on the last save one in Words ending in ick, tial, tian, sion, tion, and or, ; as, angél-ick, creden' -tial, Egyþ' -tian, occa' -sion, salva' -tion, misde-mean' -or, &c. (p. 48)*

第2章から6章までは、それぞれ2、3、4、5、および6、7、8音節語の表である。たとえば2音節語では、前の音節にアクセントのある語、後の音節にアクセントのあるものが別の表にまとめられている。同様に3音節語は3つ、4音節語は4つの表に分けられている。5音節語は第2音節にアクセントのあるものと、終わりから2つ目にあるものとそれ以外をまとめたものに分けられている。6音節以上の語はアルファベット順に列挙されている。

「指導法」では、韻律の規則を決定する語の性質や種類などを扱う語源学を理解するまでは、アクセント記号に注意して発音の練習をさせることこそが「最も早く有効な方法」と述べるに留まっている。(「書簡」、8頁)

今日でも学校文法では一般に品詞の数は8つとされている。第3部の

「語源学」で、フィシャーは4品詞体系を採っている。4品詞体系は、ラテン語文法の伝統的な8品詞体系に抗して、1710年代のギルドンとブライトランドの文法以降、18世紀前半に盛んに提唱されたものである。フィシャーは4品詞体系と英語独自の文法用語の使用を推進した改革的な文法家の一人であった。<sup>15</sup> 名詞を 'Name'、形容詞を 'Quality' と呼び、動詞をのぞいた残りの品詞を一括して 'Particle' (不変化詞) としていることからこの系統に属することがわかる。まず第1章から4章までは、それぞれ名詞、形容詞、動詞、不変化詞を解説する。第5章から7章までは、派生語、指小語など、およびラテン語借用語の解説、第8章は品詞分解の練習問答である。

副詞、接続詞、前置詞、間投詞などを不変化詞としてまとめることについて、「指導法」では、練習によって「数、性、属格、代名詞の主格、目的格、形容詞の比較変化、動詞の規則・不規則活用など」を理解すれば、おのずとそれぞれの区別がわかるようになるため、それまではあえて区分をしなくてよいとされている。(「書簡」、8-9頁) その練習法は以下のようである。

Make the Scholars write them down in their respective Pocket Books, as under Adverbs, [See p.97.] *Now, To-day, Already, Before, Yesterday, Heretofore, Long since; i.e. all the Adverbs without Distinction of Time, Number, Place, &c. and so with the Conjunctions, Prepositions, and Interjections.* Thus having them in a little Space under their Eye, any one may soon be made acquainted with the Nature and Properties of each.

要は、各自が小さな手帳を持ち、各品詞をまとめた表を作れば、品詞の区



has; that ferret Regiment is ordered to Flanders.—Transport is taken up at Lieh.

## EXAMPLES under RULE II.

**N**AMES of Number or Multitude may have either a Singular or Plural Verb, &c.

Lord! what a great Flood is there; Where is they fed!  
—The Parliament is sitting.—Common People judge by Report.

## EXAMPLES under RULE III.

**W**HEN the Adjective or Quality is carried according to its Number, it must agree with its Substantive.

—This Man are exceeding wif.—These Men loves Liquor.  
—Thosè Master is indulgent.—That Boys love play.

## EXAMPLES under RULE IV.

**T**WO or more Names Singular, having a Conjunction Copulative coming between them, will have a Verb Plural.

George and David has been fighting.—Honour and Renown attends virtuous Actions.—Many Hands makes easy Work.—Candour and Temperance in our Actions make Virtue strong.—Reputation and Honour delights the Minds of many.

## EXAMPLES under RULE V.

**W**HEN a Relative comes before the Verb, it may be of the leading State; when it follows the Verb, it may be of the following, &c.

My Father loves I.—Them Fellows always stand by one another.—To who will you give this?—To thou.—Wear I come thou to dance?

## EXAMPLES under RULE VI.

**A**M, with its past Tense was, has the leading State of a Pre-noun both before and after it, &c.

Thou art him.—These are them.—Who art thou?—I am him.

## EXAMPLES under RULE VII.

**A** Preposition has the following State of a Relative after it, &c.

John

John is below I.—She abides with thou.—They came to me.

## EXAMPLES under RULE VIII.

**W**HEN two Names come together, the former is, by the Addition of s, turned into a Possessive Quality, or Genitive Case.

Borrow your Brother's Book for me.—The Nation's Peace is disturbed.—The Lord's Name be praised.—The Father's Propriety will be the Son's Shame and Beggery.—Death is all Men's Fate.

## EXAMPLES under RULE IX.

**A** Comparative Adverb may not be set before a Quality compared by an and, &c.

Search is more faster than Aene.—Thou art the most wildest Boy I ever saw.—Death is the most shocking Thing.

## CHAPTER V.

## PROMISCUOUS EXERCISES:

OR,

## EXAMPLES under all the RULES.

**T**HE Ministers preaches, but Sinners hears not.  
The stout Soldier's Sword have been the proud Enemies Ruin.

Thou and me is both accused of the same Fault.  
The Merchants and Traders at Amsterdam has raised 17,000 l. to be distributed among the Troops who makes 60 leave Delicèe at Bergen.

Fragrancy and Industry is the two Heads of Fortune.  
The Heavens declares the Glory of God; and the Firmament show his Handiwork.

The Men drink heartily, and eat sparingly.  
Those which chuse a private Life and Retirement, tho' they may exert every generous social Virtue as far as their Influence reach, makes not the most eminent Figure in History.

He is mindful of his Master Commands.  
Proud Men foresees Evil; but the Simple pass on and is punished.

図2 『新英文法』（第2版）128-29頁

分が一目でわかり、それぞれの性質や属性を理解することができるというのである。ここでも手帳の効果的な使用が促がされている。

第4部「統語論」は5章から成る。第1章は主語と述語動詞、名詞と指示代名詞、代名詞の格変化などの「呼応」(Concord)の9つの規則である。第2章の「転置法」の例として、ミルトンの『失樂園』の詩節を引用したことは英語学史でも言及される。'Of Man's first Disobedience, and the Fruit / Of that forbidden Tree, …' に始まる6行を、転置をせずにあるべき語順に直すと、'Heavenly Muse, sing of Man's first Disobedience.' となるという。(123頁) 第3章は修辞上の3つの「文法的変則」として、省略(Ellipsis)、冗語法(Pleonasm)、代替法(Enallage)が説明されている。第4章は、第1章の個々の呼応規則に反する誤った統語を含む「悪文」(examples of bad English)がそれぞれ複数示されている。規則とそれに反

するものの事例の対照によって、正しい統語を学ぶ。たとえば第4の規則すなわち「接続詞で連結された2つ以上の名詞は、複数形の動詞をとる。例、*John and Joseph are, (not is) good Boys.*」(118頁)に反する「悪文」の例として、'*George and Daniel has been fighting.*'などが5つ挙げられている。(128頁) それに続く第5章が「誤文訂正」の問題集である。(図2)

フィシャーは第1章の冒頭で「統語」を定義して、「文の中の語と語、あるいは文と文どうしの正しい連結のこと」としている。(116頁) 「正しい連結」に対しては当然「誤った連結」も想定される。生徒に自らの誤った連結に気づかせ、文の正しい構造を理解させるのが統語学習の目的となる。この文法書の指導法で特筆すべきは、第5章の「誤文訂正練習法」である。次節では、これ以降世紀転換期までの間、多くの文法教科書に採用されたこの練習法に注目し、初等文法教育におけるその意義について論じたい。

### III

フィシャーをはじめとする18世紀の多くの文法学者にとって、文法とは、正確にまた適切に話し書くための規則であった。それ以降も、言語の規範を定めるという文法学者の役割は、基本的には変わらなかった。今日でも文法教育は多かれ少なかれ規範的に行われる。<sup>16</sup> フィシャーの誤文訂正法は、初等教育における文法指導法のイノベーションとして注目に値する。

第4部、第5章には「誤文訂正練習問題」として、統語上の誤りを含む文が第1章の規則との対応なしにアトランダムに4ページにわたって並べられている。たとえば、'*The Lyon is accounted the most strongest and most generous of all Brute Creatures.*' (p. 130) や '*How many unjust and*

wrong Things is authorized by Custom?’ (p.131) といった比較的短い文から、やや難易度の高い内容の次のような誤文が示される。

Men of profligate Lives, and such as finds themselves incapable of rising to any Distinction among their Fellow Creatures, is for pulling down all Appearances of Merit which seems to upbraid them; and Satyrists describes nothing but Deformity. (p. 131)

誤文訂正練習法はラテン語学習ですでに推奨されていた。「指導法」の筆者も、「ラテン語学習においては、誤った呼応の訂正の練習は、統語の知識を完全なものにするのに最も適切な方法であるとされている」とし、模範として『英語・ラテン語練習』（1706）の著者ネイサン・ベイリーと『新ラテン語文法』（1733）のジョン・クラークの名を挙げている。そして、これまで英語学習においてこの方法が推奨されたことはないとし、この練習方法によって正しい統語と文法の知識を身につけることこそが、英語を正しく話し、書くことにとって肝要であると言う。ラテン語の学習法として用いられたものを、母語教育に応用したものと言うことができる。

英語の統語教育に誤文訂正法を適用したのはフィシャーが最初だが、マイケルは、綴字教育においてはすでにウィリアム・ベイカーが『英語綴字・書き方規則』（[1724]、あるいはそれ以前）に「規則違反の例」として、‘*My deer and only Sun*’ あるいは ‘*Now that thy Infant Yeers ar dun*…’ などが示されていることを指摘している。また、生徒の誤りから正しい書き方を教える指導法自体はそれまでもあったが、1750年以前の綴字教則本のなかにその練習問題が印刷されているものはない。それに対し、18、19世紀転換期になると、きわめて多くのおもに綴字、統語、句読の「間違いさがし」に特化した教科書が見られるようになるという。そうしたものの例として

マイケルが挙げるのは、ジェームズ・オルダスンの『英文法練習』（1795）、ジョン・フォセットの『学校英語練習』（1796）、チャールズ・アレンの『新正書法練習』（1800）、ジョン・ホーンズィの『英語練習』（[1818]）などのほか、古典的な規範英文典の決定版ともいえるべき『英文法』（1795）を著わしたアメリカのリンドリー・マリーの『英語練習』（1797）などである。<sup>17</sup> マリーの書の副題には「綴字、統語、句読における誤りや、明瞭さや正確さを損なう規則違反を含んだ例」が載せられていることが謳われている。

この指導法に対しては、賛成者も多かった一方、『新英文法』（1771）の著者ダニエル・フェニングの「若い生徒にはわからせるより混乱させ、年長の生徒には間違い癖を直させるより助長させる」などとする批判もあった。しかし、この指導法が、子供の知的な発育段階についての意識や、子供が文法を学ぶ上で理解しにくいことがらについての認識に基づいたものであったことは事実である。<sup>18</sup> 教師の実践から生み出された、学校文法の学習全般に応用のきく指導法として、一定の有効性を持ちえたと言える。

#### IV

フィシャーの『新英文法』は、ラテン文法を踏襲する伝統的な8品詞体系ではなく4品詞体系による文法体系を、英語独自の文法用語を用いて説明した18世紀の改革的な英文典の一つと考えられている。しかし、同書は、英文法の確立を目指したものというより、そうした傾向を受けた新しい文法の基本的な内容を解き明かした優れた教科書として評価されるべきであろう。

学校文法の真価は、難解な内容を理解させるべく、生徒の年齢や知的発達段階に即した教授法に基づいて書かれているか否かにかかると言っても

よい。『新英文法』が刊行と同時に好評を得て、18世紀半ばの代表的な初等英文法教科書としてその名を残す大きな理由は、第1に、文法本編自体が、読み書きにいくぶん慣れ始めた子供や初学者の理解力に配慮した教授法に基づいて編集されていること、第2に、その具体的な指導法が第2版以降の巻頭に付されていることである。

生徒は、筆記帳や手帳を用いて教師や級友と連携して学ぶ第3部「語源学」の指導法や、第4部の統語学習のための「誤文訂正練習法」のような、具体的で実践的な方法で文法知識を身につけることができる。一方、教師の立場に立っても、同書はその実践的な性格によって好意的に受け入れられたと考えられる。「指導法について」と題された教師への指示は、決して長く懇切丁寧なものではない。しかし、それが各部、各章の編集の意図を的確に捉え、説明していることによって、教師は、苦労なく、著者の方針に従って指導が行えるようになっていく。同書は、初学者の学びやすさを考慮した指導法を含んだ文法教科書として人気を得た。なかでも「誤文訂正練習法」は、初等英語教育を実践する著者によって推奨された効果的な指導法として評価され、18世紀を通じて英語教育一般において用いられることとなったのである。

追記 本稿は平成21年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。

## 注

- 1 William Loughton, *A Practical Grammar of the English Tongue: or; a rational and easy introduction to Speaking and Writing English Correctly and Properly* (London, 1734); John Collyer, *The General Principles of Grammar; Especially Adapted to the English Tongue* (London, 1735). これらの文法教科書については別稿で論じる。

- 2 鶴見が見たものは、[Ann Fisher], *A New Grammar: Being the Most Easy Guide to Speaking and Writing the English Language Properly and Correctly*, 2nd edn (Newcastle, 1750; repr. Menston, 1968)。
- 3 [Fisher], *Grammar* の復刻版の Note を参照。
- 4 R. C. Alston, *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800*, corrected reprint of volumes I–X (Ilkley, 1974), I, pp. 25–30; *The Handbook of the History of English*, ed. by Ans van Kemenade and Bettelou Los (Oxford, 2006), pp. 541–42 を参照。
- 5 拙論「ヴァナキュラーな「古典」の編纂——18世紀イギリスにおける英語教材としてのアンソロジーの隆盛」(『成城大学短期大学部紀要』36号、2004年3月、1–16頁)。
- 6 *The Pleasing Instructor: or, Entertaining Moralist* (Newcastle, 1756), *The New English Tutor: or, Modern Preceptor* (Newcastle, 1763), *A New English Exercise Book* (Newcastle, 1770)。
- 7 Ingrid Tieken-Boon van Ostade, 'Female Grammarians of the Eighteenth Century', *Historical Sociolinguistics and Sociohistorical Linguistics*, 1 (2000); María Esther Rodríguez Gil, 'Ann Fisher: First Female Grammarian', *HSL / SHL*, 2 (2002)。
- 8 M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (Cambridge, 1964), pp. 364–71, 353–63 所掲のリストを参照。
- 9 Victor E. Newburg, *Popular Education in Eighteenth Century England* (London, 1971), pp. 79–80 を参照。
- 10 新聞広告は Rodríguez Gil の前掲論文に引用されている。
- 11 Richard Jhonson, *Grammatical Commentaries* (London, 1706), p. 3. Ian Michael, *English Grammatical Categories and the Tradition to 1800* (Cambridge, 1970), p. 192 に引用されている。
- 12 渡部昇一『英語学史』(英語学体系第13巻、大修館、1975)、349頁。
- 13 Rodríguez Gil, 'Ann Fisher, Prescriptive or Descriptive Grammarian?', *Linguistica e Filologia*, 17, 183–203 を参照。
- 14 Ian Michael, *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987), p. 128 を参照。

- 15 Michael, *EGC*, pp. 507–14 を参照。
- 16 *The Cambridge History of the English Language*, ed. by Richard M. Hogg, 6 vols (Cambridge, 1992–2001), IV (1998), ed. by Susanne Romaine の Michael, Randolph Quirk らの研究への言及を含む Edward Finegan による第 6 章、545 頁を参照。
- 17 Michael, *TE*, pp. 326–27 を参照。
- 18 *Ibid.*, pp. 329–30, 383 を参照。